

自己肯定感を高め、認め合う関係づくりを目指して

— 養護教諭の視点でかかわる校内支援 —

永 埜 昭 恵¹

保健室で接する児童には、人間関係づくりの不得手な児童や、自己肯定感の低い児童が多いと感じる。そこで、校内支援の一つとして、自己肯定感を高め互いに認め合う関係づくりを目指して、心身の健康の視点から養護教諭と学級担任が協働し授業実践を行った。そして、授業実践や職員への調査を通し、より良い校内支援を行うための養護教諭の役割について考察した。

はじめに

養護教諭の仕事は多岐にわたるが、ここ数年支援教育の推進という新たな役割が重視されている。健康相談を通して児童を支援してきたときと比べ、学級担任や教育相談コーディネーター（以下コーディネーターという）と連携し教育相談チームの一員としての役割がより大きくなっている。小さなけがでも不安を訴える児童や、不定愁訴で繰り返し保健室に来室する児童と接する中で、人間関係づくりの不得手な児童や自己肯定感の低い児童が増えていると感じる。また、2008年度の全国学力・学習状況調査から、研究対象としたA校の児童は「自分には、よいところがあると思いますか」の質問に当てはまらない、どちらかといえば当てはまらないとした児童が35.1%で全国平均に比べやや多いという結果が出ている。

「かながわ教育ビジョン」の中では、自己肯定感について「自己自身の存在に対する認識として、自らの身体的特徴や能力、性格などについて肯定的に考えたり、感じたりする感情のこと。具体的には他者とのかわりにおいて他者と異なる自己を意識し、自らの存在が受容されているのを感じるものが自己肯定感の育ちにとって重要であると考えられている。」（神奈川県教育委員会 2007）と書かれている。そこで児童の自己肯定感を高め児童一人ひとりが友達と自分を認め合える関係づくりができれば、学校生活はより安心感、充実感のあるものになると考えた。

本研究では学級担任と協働し、児童の自己肯定感の向上と認め合う関係づくりを目指した授業を行うことで児童や学級の変容について考察することを試みた。

養護教諭がその特質を生かして校内支援の一つとして授業づくりにかかわることで、児童が心身の健康に対する理解を深め、自分や友達を大事にすることにつながると考えたからである。また、学年全体で取り組

むことで、発達段階に合わせた継続した指導が可能になるのではないかと考えた。さらに、校内の支援教育における養護教諭の役割について、職員の意識調査を通して、より良い支援の在り方、校内支援体制を支える一員としての役割について考察することとした。

研究の内容

1 研究の目的

本研究で対象にした小学校3年生の児童は、友達同士の対人関係が広がり、他者と自己を比較しながら自己認識を深める発達段階にある。一方、対人関係能力が未熟であるために、他者との関係を築くことが不得手な児童もいる。

対人関係が広がる時期に、友達に自分の気持ちを伝えること、友達の気持ちを受け取ることなどの活動を経験することは重要であると思われる。気持ちを言語化し相互に伝えあう活動は、自己理解や他者理解を深める助けとなる。また、健康教育を専門とする養護教諭と、学級内の児童の対人関係の様子、個性を把握する学級担任とが協働することにより、養護教諭の特性を生かした授業づくりが可能となり、自己肯定感の向上や児童相互の認め合う関係づくりにつながると考える。協働した授業の実践を通して、児童理解を深め、より良い支援の在り方を解明したいと考える。あわせて、校内支援体制における養護教諭の役割を考察する。

2 研究の方法

(1) 学級担任との協働による授業の実践

学級担任と協働し、児童の自己肯定感の向上と互いを認め合う関係づくりを目指した授業を行い、児童や学級の変容を考察することとした。

(2) 支援教育における養護教諭の役割についての意識調査

支援チームの一員として、養護教諭にどんな役割が求められているかを中心に、A校の職員にアンケート調査及び聞き取り調査を行った。

1 茅ヶ崎市立茅ヶ崎小学校
研究分野（学校コンサルテーション臨床研究）

(1)学級担任との協働による授業の実践について

ア 授業について

(7)授業の準備

- ①対象学級で児童の対人関係の様子を行動観察した。
- ②学年会に参加し、まず自己肯定感を高め認め合う関係をつくるというねらいを共有した。配慮の必要な児童について話し合うことで、児童理解を深め、TT(ティーム・ティーチング)の役割を話し合った。他にも、学級のエピソードから、児童が自分の経験を想起しやすいように教師が行う寸劇の台詞を決めたり、児童がお互いの良さを見付けるヒントを書いたプリントを準備したりした。
- ③第1時の授業後各学級で、友達の良いところ探しの準備として、自他の理解につながる内容の絵本を学級担任が読み聞かせた。
- ④第2時の発展として「よいとこビンゴ」(越智 2009)(それぞれ自分の良いところを9つ書き、友達同士で良いところを当てる活動)の資料を準備した。

(イ)授業の概要

実施期間 平成21年9月7日～10月29日(4日間)

対象 第3学年4学級(120名)

授業時数 各学級 2時間

題材名 心と体のつながりを知ろう

ねらい ・ことばにはふわふわことばとチクチクことばがあることを知る。
 ・心と体はつながっていることを知る。

(ウ)授業の流れ(第1表)

第1時の導入では児童同士が握手で気持ちを合わせる活動をし、気持ちが通じるとうれしくなる体験をした。その後、4人グループに分かれて日常どのようなことばでうれしく温かい気持ちになるか、反対にどんなことばを言われると悲しく嫌な気持ちになるかをプリントにそれぞれが記入し、他者理解を深めるためどんなことばを書いたかお互いに伝え合った。まとめでは、保健室で実際にあったエピソードを交え、視覚的な資料を用いて、ことばには力があり人の心を傷付けることや元気付けることがあること、心と体はつながっており、心の元気が無くなると、頭痛や腹痛などの症状が出る場合があることを説明した。次に感情に注目するよう働きかけ、感情を言語化できると心の整理がしやすいことや、心の中に不快な感情をためすぎると心身に影響があることを説明した。そして、困りごとがあれば誰かに話してほしいこと、学校には学級担任、養護教諭、心の教育相談員等、話を聞く大人がいることについて児童に安心感を与えるように説明した。

第2時の導入では、お互いの小さな発見につながるように好きな色やテレビ番組などを、握手をして教えあった。理由や事実がなければ「自分っていいな」とはなかなか思えないと考え、4人グループに分かれた後、友達の良いところを見つけてカードに書かせた。

次に、気持ちが相手に届くように、心を込めてカードを読んで渡す活動を行うことで、周囲から受け入れられていることを意識できるようにした。その際、TTの良さを生かし全員良いところが書けるように、書く活動や、話し合い活動のサポートを行った。活動後、養護教諭から、それぞれに良さのある自分や友達を大切にしてほしいこと、それが、心の健康にもつながること、健康とは心も体も元気なことであることを説明した。その後に学級担任から日頃感じている学級の良いところを伝えてもらった。最後に、「友達の良いところを見つけられたか」「自分の良いところはどんなところか」「自分のことが好きか」などを振り返りシートに記入させた。

二時間のTTによる授業後、発展として各学級で学級活動として「よいとこビンゴ」を行った。

第1表 授業の流れ

学習活動	児童の活動	留意事項
第1時 ふわふわことばとチクチクことば		
導入 ショートエクササイズ ①深呼吸 ②握手で気持ちを合わせる ③感じたことをことばにする 展開 ①教師による寸劇視聴グループ活動 ②体験したことを思い出しプリントに記入 ③自分のプリントを読んでグループの人に話す まとめと振り返り 養護教諭から心と体のつながりの話を聞く 振り返りシートの記入	・心や体に意識を向ける ・気持ちが通じるとうれしくなることを体験する ・日頃自分が経験したことを想起する ・友達の気持ちを知る ・ことばを伝えることで、お互いに言われたときの気持ちを体験する ・心と体は密接につながっており、心の状態が体に影響することを	配慮の必要な児童の指導に当たる グループ活動の進行を援助する 保健室のエピソードを交える
第2時 気持ちを伝えよう		
導入 握手で紹介 展開 グループ活動 ①友達の良いところを探しカードに書く ②カードを渡しながら声に出して伝える まとめと振り返り 養護教諭から学級担任のメッセージ 振り返りシートの記入	・お互いに自分の好きなことを伝え合う ・お互いの良いところを見付け、カードに記入する ・伝えるとき、伝わったときの気持ちを体験する ・お互いを大切にすることはみんなの元気につながることを	理由や事実を記入する 全員が記入できるようにする
発展 学級活動 お互いをもっと知ろう		
「よいとこビンゴ」を行う	・お互いの良いところを認め合う	

イ 授業の結果と考察

(7)第1時の活動について

授業後に記入した振り返りシートを見ると、言われ

たいことば、言われたくないことばでは、児童は自分の体験を振り返り書くことができた。言われたいことばは感謝される、ほめられる、誘われることばなど多種であった。言われたくないことばは相手を排除することばが多く、生命にかかわるようなことばも書かれていた。言われた側の傷付きは大きく、日常の継続した指導が必要であると考え。児童の多くは心が傷付いた経験がある。ふわふわことばやチクチクことばを出し合う中で自他の感じ方の違いに気付いた児童もいた。ことばを想像するだけでなく、どんなことばで傷付いているのか、直接友達から聞くことで、友達への理解がより深まる効果が見られた。

(イ) 第2時の活動について

第2時ではグループの中でお互いの良いところを探した。日常あまり話をしたことがない友達のことを、じっくり考え、良いところを認める活動をすることで、他者理解につながる効果が見られた。また、友達が自分の良いところを認めていると実感したことが振り返りシートの記述(第2表)や授業の感想などに書かれていた。

第2表 振り返りシートの児童の記述

振り返りシートの記述より
○ 自他の理解の深まり
・ 自分のことがもっとわかった
・ 人の心はひとりひとりちがう
・ 友だちのいいところはこんなにあったんだ
・ みんなから自分へのきもちがわかった
○ 行動化への意欲
・ みんなともっと仲良くなりしたい
・ もっと友だちのことを知りたい
・ みんなにやさしくしていいクラスにしなきゃと思った
・ つぎは自分からさそおうとしよう
・ これからはふわふわことばをふやす
○ 自分への変化の気付き
・ 自分が強くなったように思える
・ 心にあったもやが晴れた気がします
・こんなにきもちが伝わるとすっきりするな
・ 学習をやったら自分がかわった

振り返りシートの「自分の良いところ」に記入した児童は、第1時の授業後に比べ、第2時の授業後は76.5%から95.5%に増加した。お互いを認め合う活動を行うことは、児童の自己肯定感の向上への一歩になったと考える。また、行動化への意欲が見られたのは自己肯定感が向上したためだと考える。

振り返りシートの他項目を見ると、まず、友達の良いところを多く書いた児童は、自分の良いところを記入した割合が高い。次に自分のことが好きかどうかの回答を「自分のことが好き、とても好き」と「自分の

ことがあまり好きでない、好きでない」に分けて傾向を見ると、自分のことが好きな児童は友達の良いところを多く見付ける児童である割合が高い。このことから、友達の良いところをより多く認める児童は、自己肯定感の高い傾向が見られる。ここから、自己肯定感を高くすることはお互いを認め合う関係づくりに大切であるということが分かる。

(ウ) 学級担任の観察や児童の様子について

学級担任からは、まず、児童がことばを意識して生活するようになったという報告があった。傷付けることばを減らそうとしていることは、温かいことばを増やして良い学級にしようという意識の表れだと考える。他にも優しくしてもらったこと等行動にも着目するようになり、児童に良いところを見付けるという視点が広がったという報告や、教師も意識して小さな事でもほめるようにしたところ、児童の頑張る姿や、児童がお互いにほめ合う姿が見られたという報告があった。これはお互いを認め合う関係が広がったからだと考えられる。

授業の感想として、「手紙みたいなのをわたされてとてもうれしい。心がふわふわになった。とても楽しかった」「○○さんとやって、ちょっと仲がふかまったかなと思いました」という記述があった。これは、気持ちを通じ合う体験は児童の人間関係を良くし、友人関係が広がることでお互いを認め合う機会も増えていくと受け止められる。

個別の児童の変容の例としてA児、B児を挙げてみる。A児は夏休み明けから不定愁訴で保健室に頻繁に来室している児童であった。第1時の授業後そばに来て、保健室では話さなかった腹痛や頭痛の原因と思われる学級内でのいやなことについて話し始めた。A児は学級担任と話せるというので、担任に事情を伝え、担任がA児と話をした。担任の対応後しばらく保健室へ来ていない。このことは、授業を受けたことで、自分の気持ちを言語化することにつながり、他者から理解される一歩となった。また、普段保健室にはあまり来ないB児が、第1時の終了後話しかけてきた。第2時の終了後には、無言で抱きついてきたので、辛いことの有無を尋ねるとうなずいた。児童の気持ちを受け止め、担任に児童の事情を説明し、対応してもらった。冬休み前の振り返りで、B児は頑張ったことの中に「あいての気持ちがわかるようになった」「お友だちとなかよしになった」と記入している。表情も明るくなった。担任が対応する中で、B児は自分の気持ちを伝え、友達の思っていることを聞き、他者理解が進み自己肯定感も向上したと考える。

(エ) 授業後の発展の取組みから

掛け図をしばらく掲示して、ふわふわことばとチクチクことばを児童に意識付けた。他にも「うれしかったひと声」を帰りの会で発表させたり、学級通信に今

週の「よいところ」を載せたりし、児童をほめるよう意識する等各学級で発展的な取組みがあった。これは、認め合う関係づくりに効果的な取組みであった。

ある学級では授業前、他の学級に比べて保健室来室者が多い傾向があった。第2時の授業で友達の良いところを探す活動に長い時間を要する児童もいたので第2時の授業後、発展として担任が「よいとこビンゴ」を行った。その後、友達同士が仲良くなかかわる様子から「子どもの心の壁が取れてきた気がする」という学級担任の報告があった。同時期に保健室来室者が減少している。また、同じように取り組んだ他の学級でも自分の良いところをすぐに書ける児童が増えた。このことから取組みを継続することで自分の良さを自覚する児童が増え、児童の人間関係がより深まったと推察される。また保健室の来室者が減ったのは、教室での人間関係が充実したことや、身体症状で表現する児童が減少したためと考える。

(オ) より良い支援に向けて

学級担任と協働し授業を行うことで、保健室では見られない児童の様子を知ることができ、児童の全体像の理解に役立った。それが、学年会で気になる児童の支援策を考えるとときに有効であった。保健室で児童と個別にかかわるだけでなく、頻繁に来室する児童の教室での様子を見ることで学級担任と共通認識を持つことができ、保健室で行う支援にも役立つと考える。

また、B児のようにこれまで保健室に来室しなかった児童にも、支援ニーズがあることが分かった。児童の中には、養護教諭に直接悩みを相談しなくても、A児やB児のように悩みを受け止めてもらうことで、学級担任に話すことのできる児童もいる。そのような日常的なかかわりが、問題を小さいうちに解決することにつながると考える。養護教諭が児童から学級での人間関係や悩みを聞くこともあるが、実際に学級内で対応するのは学級担任であることが多く、連携が必要である。

個別指導だけでなく、集団指導の場で心身の健康についての話を養護教諭から聞くと、児童が自他の心や体について理解しやすくなるという学級担任からの発言があった。それは、児童が養護教諭を体の専門家としてとらえていることにあると考える。つまり、医学的なメカニズムの説明ができ、豊富な教材や資料がある等の専門性にかかわっているのだと推察される。そして、児童をありのまま受け止め、評価を行わないことにも関係していると考えられる。TTで授業を行うことで、学級担任も児童の様子をじっくり観察することやかわることができ、中には普段と違った様子を見せる児童もいて、学級担任にも児童理解が深まる効果があった。また、学年で取り組むことによりどの児童も知識を持つことになり、次の段階の取組みへ発展させやすい面もある。養護教諭は1年から6年まで長期に

渡り、すべての児童とかかわることができる。今後様々な場面で学級担任と協働することで、学校全体に自己肯定感を高め認め合う関係づくりが広がる効果が期待できる。

以上を通して、お互いを認め合う関係づくりはこれからも必要であると考えられる。そして、児童の全体像の把握には多くの人の目で児童を見守ることが必要である。今回の授業では、「友達の良いところを認める、良いところのある自分に気付く、自分のことを好きだと思える児童」が増え、安心感、充実感を持って学校生活を送ることにつながると考える。

(2) 支援教育における養護教諭の役割についての意識調査について

ア 職員に対するアンケート調査の結果について

支援チームの一員として、養護教諭にどんな役割が求められているかを知るため、以下の観点から質問を構成し、アンケート調査を11月に実施した。

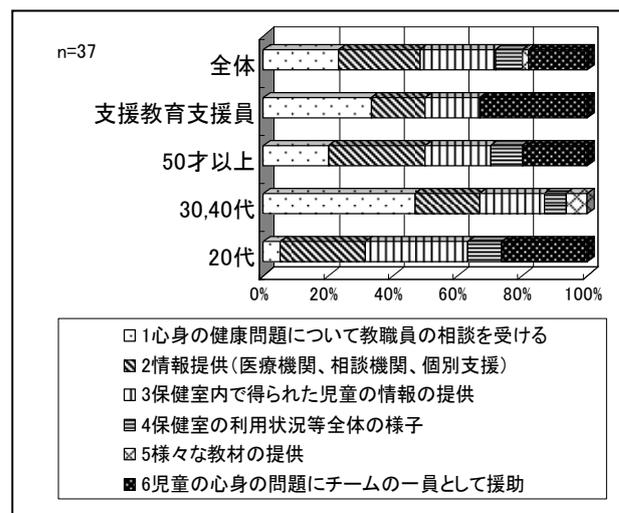
○養護教諭に期待する役割

○連携したいと思う授業について

○A校の支援教育について感じていること

調査対象はA小学校教員等 53 名で 37 名（回収率 69.8%）の回答を得た。

(7) 養護教諭に求める役割について

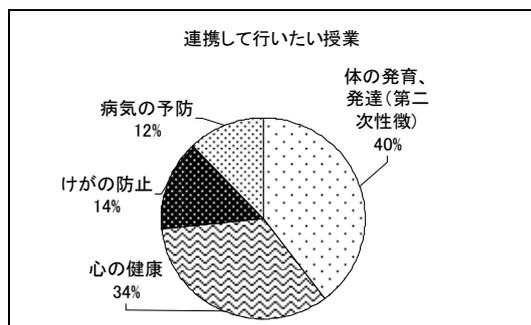


第1図 養護教諭に期待する役割

A小学校教員全体の数値としては、1, 2, 3が23%~25%でほぼ同じ割合であった(第1図)。具体的記述からは、個に対しての専門性を生かした情報提供、支援ニーズの多少にかかわらず児童の情報がほしいと考える学級担任が多い。また、学級担任が相談したいというニーズが高い。職種、年代により期待する役割に差が見られた。年代別の特徴として20代では「保護者の理解を得にくいときにつないでほしい」「児童が保健室でどんなことを言っているか知りたい」という記述があり、保護者の理解を得にくいときに苦慮していることや、児童理解のために情報が知りたいと考える職員が多いことが分かる。30代では教員が困ったことに

ついて「ためないうちに聞いてほしい」という、相談のニーズが高く、支援教育支援員にはチームの一員としての児童支援や相談相手としての役割ニーズが高いなどそれぞれが求める役割は異なっている。

(イ) 連携して行いたい授業



第2図 連携して行いたい授業「保健」の単元別割合

連携して行いたい授業の中で特に多いのは、これまでかかわることの多かった「保健」の中の、体の発育、発達(第2図)であった。その中でも第二性徴については、養護教諭は医学的な知識をベースに説明することができ、教材についても情報を入手しやすい。体の発育・発達の学習は専門性にかかわる部分であり、今後も機会が多いと考える。次は、心の健康が挙げられている。必要性を挙げているのは、50才以上では40%以上と多かった。長い指導経験上、以前の児童と比べた最近の児童の傾向から必要性を感じていると推察する。

(ウ) アンケート調査の記述から

支援教育における役割については、「児童や保護者の話を聞いてほしい」という声や、「養護教諭の役割が増えて大変ではないか」という心配の声もあった。A校の支援教育を充実させるために必要なことについては、「研修や学習会の必要性」を挙げた職員が多い。他には「個々の情報を必要なときに取り出せるようなものがほしい」という声や、関連して「情報の共有とフィードバック」が挙がっていた。支援教育に関して日頃感じていることでは、学校全体というキーワードが浮かんできた。他には、「必要に応じたチームをいかにつくるか、チームとしてどう働きかけるか」「とても大切に難しい」という意見があった。分からないことが多く、迷いながら実践している実態も見えてきた。

イ 聞き取り調査の結果について

調査対象はA小学校、支援教育で重要な役割にある校長、教頭、教務主任、コーディネーター、養護教諭の5名に、次の3点について聞き取り調査を行い、より詳しく考えを聞き、それを基に以下にまとめた。

(7) 支援教育の推進者として、養護教諭に求めるもの

まず、ケアされたいと思って来室する児童の心に寄り添う指導や、受け入れる、つなぐという個への対応が挙げられている。A校の学校規模(児童数約830名)を考えると、養護教諭は2名配置、コーディネーター

は学級事務等の無い級外が良いという意見がある。養護教諭はどの児童、職員ともかかわりが持て、学校全体を見渡すことができる点を生かすと良いという考えや、現在のようにコーディネーターが担任をしていると相談を持ちかけられても教室に様子を見に行くことが難しいので、保健室にいる養護教諭にも様子を見てもらえると良いだろうという意見もあった。養護教諭とコーディネーターとが連絡を密にしていけることがより良い支援につながると考える職員が多い。

(イ) 学級担任と養護教諭が協働して授業など児童の支援を行うことについて

今後、児童のコミュニケーション能力の育成も必要であり、そこに養護教諭がかかわることも増えていくのではないかという意見や、養護教諭と一緒に授業をすることで児童とのかかわりが持て、児童が養護教諭へ話をしようというつながりもできるという意見があった。また、児童を支援するためには、その児童の日常の様子を見る機会をつくるのが大切なので、もっと機会をつくとよいという意見があった。

(ウ) 支援教育の課題に関して

児童の一番の支援者である学級担任をどう支えるかが課題であり、養護教諭が支援の必要な児童のいる学年の学年会へ参加することも必要である。多くの目で児童を見守ることが深い理解につながり、より良い支援になるという考えが多かった。

ウ 調査の考察

(7) 校内支援全体について

A校では、コーディネーターは一人の学級担任が担当しているため、時間的制約があり他学年の職員との話し合いが十分とれているとはいえない。定例のケース会議とともに、その後の継続的な会議も今まで以上に開き、経過を把握し支援策の評価や見直しなどの話し合いが必要だと感じる。支援の必要な児童について児童の状況や支援の状況が共有できない現状がある。また、支援の必要な児童への具体的対応について研修の機会を望む声も多い。小学校では児童は学級担任と過ごす時間が長く、学校での一番の支援者は学級担任である。その学級担任をチームでどう支えていくかが重要であると考えられる。全体の課題としては以下の三点が挙げられている。

- | | |
|-----|----------------|
| 課題1 | 学校全体で支援する体制の充実 |
| 課題2 | 支援教育の研究会、研修の充実 |
| 課題3 | ケース会議の充実 |

課題1については、調査では、支援教育担当以外の職員に「学校全体での支援」を望む声が多かった。これには、職員全体で支援教育について話し合いの場を持つこと、コーディネーターの役割について理解を図りどのように支援を行うのかを周知すること、ケース会議の報告、支援策の周知を今まで以上に丁寧に行っ

ていくこと等が必要と考えられる。

課題2については、これまでの講義による研修に加え、より実践的な指導法など、相互の実践を伝え合い、効果の上がった方法を蓄積することが有効だと考える。また、新たな課題については、スクールカウンセラーや特別支援学校のセンター機能を活用し、講師を要請しての研修も可能である。

課題3については、年間計画にあるケース会議に加えて、学年会でも時間枠を設けて行うことが考えられる。支援策の評価を行い、次の支援へつなげることを充実させたい。支援シートを活用した記録を継続して作成することが有効だと考える。その際、養護教諭も参加できると良い。また、会議の進行が円滑であるよう、会議の進行の工夫、会議の内容の精選が必要であろう。

(イ) 養護教諭の役割について

第一に校内でチームの連携を円滑にする「つなぐ」という役割である。アンケート結果から、「相談」「他機関の情報提供」「児童の情報提供」「児童への援助」という「つなぐ」ことを必要とする役割期待の割合を合計すると9割以上になる。これにはお互いの仕事の役割や外部機関の情報を十分に理解することがまず大切だと考える。中でも定期的に話し合いを持ちコーディネーターとの連携を深めることが重要である。お互いの連携を密にすることで補い合い、より良い支援につながる効果が期待できる。

また、チームの一員として養護教諭の特性を生かして学級担任を支え、学級担任に孤立感を感じさせないようにすることが重要だと考える。それは、学級担任と一緒に児童を支援することにもつながる。

第二はケース会議等で話し合われた支援策の経過を把握することである。養護教諭も、ケース会議で話し合われた児童の様子について学年会に参加し把握していくことや、教室での素顔の児童の様子を見ることも必要となるであろう。

養護教諭は保健室で様々な児童の支援ニーズに応じている。保健室での過ごし方についても、職員全体と情報を共有することや記録が必要となる。そこから、援助の必要な児童の支援策につながる可能性が考えられる。

3 研究のまとめと課題

学級担任と養護教諭が協働して心身の健康という視点を加えた授業の実践を通して、児童は新しい気付きを持ち、一人ひとりの良さを改めて意識することができた。このことは、児童一人ひとりの自己肯定感を高めることにつながったと推察される。また、養護教諭にとっても児童との親近感が高まっただけでなく、潜在的なニーズを把握することができた。今後も互いに認め合う関係づくりを様々な場面で行うことで、児童

一人ひとりが自他を大切に、学校生活に安心感、充実感を持つことにつながるのではないかと考える。

保健室を頻繁に訪れる児童は自己肯定感が低いと感じる児童が多い。児童を長期に渡り見守ることができるとを生かし、心身の健康を支えるという視点で一人ひとりの児童に受容的に対応することが、自己肯定感を支えることにつながると推察する。そして、校内でどう連携していくかを意識して支援を行うことが大切である。養護教諭が一人で行えることは限られている。校内の理解を得て、連携するためにも養護教諭から発信していくことも大切だと考える。また、養護教諭に期待される支援ニーズは様々である。どのようなニーズがあるのかを把握し、そのニーズに応える柔軟性を持ちたい。

今後、学校や児童の状況を踏まえ、養護教諭の特性を生かしてコーディネーターとどう連携していくか具体的な方法を探ることが必要である。また、継続した支援を行うために引継ぎシートを活用していくことを考えている。これから、保健室経営計画の中でも支援教育にかかわる目標を充実させ、児童の心身の変化に気付き、問題解決のために柔軟な対応ができる立場として校内支援の推進に努めていきたい。

おわりに

保健室での児童とのかかわりから気付いたことを生かし、一つの方策として授業を行うことで、自己肯定感を高める一助になった。今後更に児童理解を深め、チームの連携を図りより良い校内支援につなげたいと考える。本研究を進めるにあたり御協力いただいた多くの方々に心から感謝を申し上げ研究の結びとしたい。

引用文献

神奈川県教育委員会 2007 「かながわ教育ビジョン」
p. 63

参考文献

國分康孝監修 1999 『ソーシャルスキル教育で学校が変わる 小学校』 図書文化
石隈利紀 1999 『学校心理学』 誠信書房
大竹直子 2005 『自己表現ワークシート』 図書文化
越智泰子 2009 「自尊感情を高めるライフスキル」(『月刊 学校教育相談』 2009 ほんの森出版)
戸田まり 2008 「児童期における自己の発達」 榎本博明編 『自己心理学 2 生涯発達へのアプローチ』 金子書房 pp. 175-188
中山志保子 2009 「養護教諭の重要な役割 (小学校)」(『月刊 指導と評価』 図書文化)
諸富祥彦 2000 『自分を好きになる子を育てる先生』 図書文化